

愛

題字 春霞 書

日本福音ルーテルなごや希望教会

発行所 名古屋市千種区今池 3-5-19

今池礼拝所

Tel.052(732)5545

名古屋市千種区富士見台 4-100 自由ヶ丘礼拝所

Tel.052(722)5796

名古屋市名東区高柳町 708

名東礼拝所

Tel.052(771)5267

発行者 末竹 十大

2014 年 10 月 12 日発行

季刊 第 22 号

みこころ

牧師 末竹 十大

みこころとは何か。神の意志である。神の意志は神のみがご存知であり、我々人間はすべてを知ることにはできない。ただ一つ、我々が知らなければならないのは、神の意志のみがなるということである。

我々は、順調に事が進むことをみこころだと考えたいものである。しかし、みこころは順調、不調を越えているものである。順調さの中で、我々は傲慢になり、自分の計画が神の意志だと考えがちである。自分が神の意志に従っているがゆえに、事が順調に運ぶのだと思ってしまうのである。

しかし、神の意志は人間が従おうと従うまいとなる。むしろ、神の意志に従わないのが人間なのである。何故なら、人間はすべて罪人なのだから。罪に支配されている人間が計画することはすべて神の意志に反している。人間は幼いときから悪いことばかりを計画していると創世記 8 章 21 節にある通りである。

人間が神の意志を実現することはできない。順調に事が運ぶことを通して、

我々はサタンに支配されてしまう。恐ろしいことだが、順

調さの中で我々は神に反して生きるように導かれるのである。それでも、神の意志はなる、我々の計画に反して。

我々が計画しなくとも、計画しようとも、神の意志だけが実現するということになる。我々人間が罪深くとも、義しいことを行おうとも、神の意志が実現する。神の意志だけが実現する。それが、我々が神に生かされている世界である。

神の意志は、如何なる人間的な妨げによっても覆されることはない。十字架を起こした人間によって、神の救いの業が完成したように、我々人間の背信を通して神が救いを完成することが起こるのである。人間的な思い、人間的な業を救いへと転換するお方、人間的妨げにも関わらず、ご自身の意志を実現し給うお方こそ神である。悪を働くこのわたしがみこころに従う者として生きることができまうように、共に祈らう。



「空間と光で教会を想う」



高垣建次郎

現在広島の学校のチャペルの設計を進めています。空間のヒント

を得る為に昨年の 6 月にフィンランドを訪れ、各地に点在する教会を見て廻りました。冬の長い北欧ではいかに柔らかい光を取り込みながら祈りの空間を醸し出すか、どこ教会でもその工夫が見て取れました。

フィンランドではほとんどがルーテル派の教会で、いずれ縁があればと思っていた矢先になごや希望教会の話が無いこみ、念ずれば叶うという言葉に改めて噛みしめました。ヘルシンキ郊外やツルクの街で出会った、思わず跪きたくするような荘厳な空間を今池の地で具現化できるか、非常に大きな課題を背負った気分になりました。

建築家としては、光と影の綾によって感動を呼び起こす空間を創出する事を目指しています。色々な種類の建築がありますが、ほとんどが機能優先でなかなかその夢を実現する機会がありませんが、教会や修道院の設計ではそのチャンスと巡り会う事が出来ます。幸い設計事務所を開設して以来、かなりの割合でその関連の仕事を手掛ける機会に恵まれ

ております。

「建築とは経験の淘汰されたものなり」という我が国の代表的な建築家白井晟一の有名な言葉ですが、良い空間を実現させるためには先人達の設計した実例を数多く体験して、そこから様々なヒントをつかみ取ることが肝要です。建築への想い、教会への想いは、私自身も世界各地を旅して得た積み重ねの中から生まれて来ています。

いくつも訪れた教会の中で、最も心に残った空間がフランスの片田舎のロンシャンの教会と米国ボストン近郊のマサチューセッツ工科大学(MIT)チャペルです。いずれもとて写真を通してだけでは実感できない、実際に体験しないとその素晴らしさを掴む事の出来ない空間です。

スイス国境に近い片田舎のロンシャンにあるチャペルは、なかなか交通の便が悪くて、建築家しか訪れないような所ですが、20 世紀の巨匠で画家でもあったル・コルビジェの代表作です。外見は雲を頭に抱いた彫塑的な形ですが、どちらかと言えば教会が畏(かしこ)



ロンシャンのチャペル

まった相似形が多い中で、自由に流れるような形態が特徴です。中に入ると薄暗くて目が慣れるまでにしばらく時間がかかりますが、彫刻的に切り取られた厚い壁の開口からは、ステンドグラスを通して神秘的な光が不思議な空間を創り出しています。

旅のスケジュールの都合で、3時間ばかり滞在すれば十分かと思っていましたが、時の過ぎるのを忘れて去りがたい境地に陥りました。たまたまそこで出会ったアメリカ人の建築学科の学生と話す機会を得ましたが、彼は実に1週間も野宿しながらこのチャペルに通い詰めて、一日の光の移ろいや天候の違いによる室内外の表情を味わっているようでした。いつも神風ツアーしか計画していない我を顧み深く反省しました。良い建築を見極め、

想いを募らせるにはその位の努力が必要なのだと思います。

アメリカの街はボストンやサンフランシスコといった一部の魅力的な都市をのぞいて、格子状の無味乾燥な街並みが多く見るべきものが少ないので、まずは中心から少し外れたところにある大学のキャンパスに直行します。建物と建物との間の空間が中庭となり、広場となり、コートヤードとなって学生達のくつ

ろぎの空間となっています。そこに差し込む光も季節と時の移り変わりによって様々に変化します。

そのキャンパスの主要な位置に、必ず小振りだけど魅力的なチャペルが存在します。そこはあらゆる宗派を超えて誰もが静かに祈ることが出来る静寂な空間が見受けられます。その最も代表的なのが、東海岸ボストン近郊の MIT チャペルです。

極めてシンプルな円形の筒をレンガで包まれた建物が、広い芝生に覆われた中庭に静かに佇んでいます。エントランスの低い天井のホールを抜けていくと、



MIT チェペル

薄暗い中に天から舞い降りるようなオブジェがトップライトの光を受けてきらきらと舞っています。側面の足元にあけられた開口からは、外部を一周している水面の反射で、

揺らめきのある光が室内を漂っています。4年間のボストン滞在中は機会あるごとにこのチャペルを訪れ、ゆったりとした祈りの空間を感動と共に堪能することが出来ました。

この二つの事例のみならず今までの多くの体験をふまえて、誰しものが祈りの世界に引き込まれるような夢のある教会の実現を、皆様と一緒に目指したいと思います。

幼児教育にたずさわって

亀山 千代江

毎日、周りの方々に支えて頂いて子どもたちと生活を共にできることに感謝をしています。幼稚園にいますと子どもたちや保護者の方々から学ぶ事の多さに驚くばかりです。

9月のある日、保護者会の役員の方から「先生、教会の駐車場の銀杏を取りたいのでバケツとトングを貸してもらえますか。」と言われました。毎年一番早く教会の駐車場の銀杏が落ち始めるのですが、今年は例年になく早く銀案が実り駐車場に落ち始めていました。「えっ、うれしい取っていただけるの。」と聞きますと「みんなが踏んでしまう前に取り除きたいので、軍手もお願いします。」との事でした。早速、バケツとトングと軍手を用意して駐車場に置きますと保護者の方が毎日、銀杏を取って入れてくださいました。そのお蔭で駐車場に銀杏の皮が張り付くことも無く綺麗でした。

毎年、園庭の銀杏が落ち始めますと教師の朝の掃除に銀杏取りが加わります。取っても取っても落ちてくる銀杏に子どもたちも「先生、挟むの貸して。」との声。トングは子どもには危ないので割り箸を渡しますと、しゃがみこみ一つひとつ割り箸で挟み、バケツに入れてくれました。朝の体操の前には、身支度が早

くできた子どもたちが得意げに「ほら見て見て。」と割り箸で銀杏を挟ん



でバケツに入れてくれました。何も知らない年少児が踏みつけると年長児が「これは踏むとダメなんだよ。」「臭いのが靴につくよ。」「教会のお手伝いなんだよ。」「神さまのお手伝いだよ。」と知っている限りの言葉で話す姿がありました。言われた子どもはじっとみんなの姿を見てから「ぼくもやる。」「私も貸して。」と割り箸を手に持って真似をしている姿もありました。降園時には子どもたちのお迎え前に、保護者の方が銀杏を拾ってバケツに入れてくださいました。この後は教会の方にバトンタッチしてルーテル銀杏の出来上がりを待ちます。

小さな銀杏ですが保護者の方や子どもたちや教師や教会の方の思いがいっぱい注がれたルーテル銀杏が愛おしいです。

保護者の方々が自主的に動いて一生懸命に力を注ぎ、ルーテル幼稚園を大事にしてくださる姿がとても嬉しく、この出会いに感謝をするばかりです。

保護者の方と一緒に手を携えて、子どもたちの成長を見守る事ができる事に、心から感謝しています。

いのちの言葉

子どもと過ごす中で

鍋谷 貴子



『わたしの名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである。私を受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。』

(マルコ 9 : 37)

この聖書の箇所との一番初めの出会いは、私が保育科の学生だった頃です。キリスト教保育の授業で一番初めに聞いた聖書の言葉です。「保育者にとってこれは、重要なことです。」と授業の中で先生が何度も繰り返されました。でも、強調して教えられる意味が、さっぱりわかりませんでした。

保育者になり、3年目の頃に当時働いていたカトリックの幼稚園の園長先生が、廊下に落ちていた子どものポケットティッシュを拾い、私たち保育者に「みんながよく通る廊下に子どものティッシュが落ちたままになっていましたよ。

なぜ、だれにも拾われなかったのでしょうか。」とおっしゃいました。内容は、出来事を話されていますが、口調は、怒られているようでした。その時園長先生は、小さなもの、自分より低い所にあるものに目を向けられる保育者であって欲しいと言われました。落ちていることに気づけなかった私は、今後は、保育の中でよく周りをみながら子どもたちと過ごそう！と思いました。

何年か経ち、子どもたちと幼稚園で過ごすことが楽しくなってきたころに、毎日登園すると廊下の角に置いてある幼いころのイエス様の絵を通り過ぎてから振り返ってもう一度みて部屋に行く男の子の姿に気づき、私は、毎日その子の様子を楽しみに見守っていました。ある日、彼は通り過ぎず絵の前に立ち止まりおじぎをして立ち去りました。そのことが印象的だったので、保育後の振り返りの時間にその男の子のことを話しました。園長先生は、「先生は、子どもたちから素敵なものをもらいましたね。」と言われました。その時にこの聖書の言葉を園長先生がキリスト教保育指針から読まれました。そして、子どもを保育する時、子どもに何かを教えることより、子どもに目を向け、子どもの視線で見、感じ、考えることが保育者に求められて

いることだと話してくださり、ようやくポケットティッシュの意味もわかったことを思い出します。

以来、私は、保育する中で迷ったり、戸惑ったりすると、この言葉を思い出し、

子どもの今のそのままの姿を素直にみられるよう、こころ落ちつかせて子どもと向き合うようにしています。これからもたくさん子どもたちとの出会いが与えられますように祈りつつ。

秋の賛美俳句

秋高し 牧師の口に 神宿り

野菊咲き 御言葉聴き 信徒なり

天高し 風の囁き 祈りなり

神崇め 稲穂のごとく 顔さげ

天高し 御言葉告げし 笑顔受く

みのる

十字架の 主に委ねつつ 歩む道

礼拝に 心とどのえ 急ぎ足

ハンドベル 愛と平和を おくる鐘

ハンドベル 心の扉を あける鐘

秋告げる 紅葉が庭で 色を増し

菜園で 育てた小芋 膳にのり

としこ

編集後記

季刊誌「愛」の編集に尽力してくださった川上勝編集委員長が一身上の都合で委員長を降りられました。突然なことで、22号のための原稿を皆様にお願ひしておりましたので、急遽、末竹先生が編集の業を担ってくださり、発行にこぎつけました。

私共なごや希望教会がひとつとなつて歩みたいとの思いを「愛」にこめて編集してきました。これからもまた新しい方々で「愛」が発行されますように祈っています。どうぞ「愛」の編集長・編集委員になってください。大募集です！

よろしくお願ひいたします。

(菊池幸子)

川上勝編集長の辞任を受けて、役員会では、菊池幸子編集委員の辞任も認めました。どなたか、編集長、編集委員として奉仕くださる方々を募集いたします。手を上げてくださる方が現れるまで、季刊紙「愛」は休刊いたします。

(末竹十大)